

“儲けて明るい酪農の再構築を”

■繁殖状況は「正常」それとも？ ■牛群の分娩間隔はどのような状態？

酪農経営の基本は「土づくり」、「草づくり」、「牛づくり」と先人から語り継がれていますが、広島県の酪農経営は、一戸当たりの飼養頭数の多頭化とともに購入飼料に依存した経営体へと変化を辿る中で、土・草づくりに手が回らぬ現象も生じました。

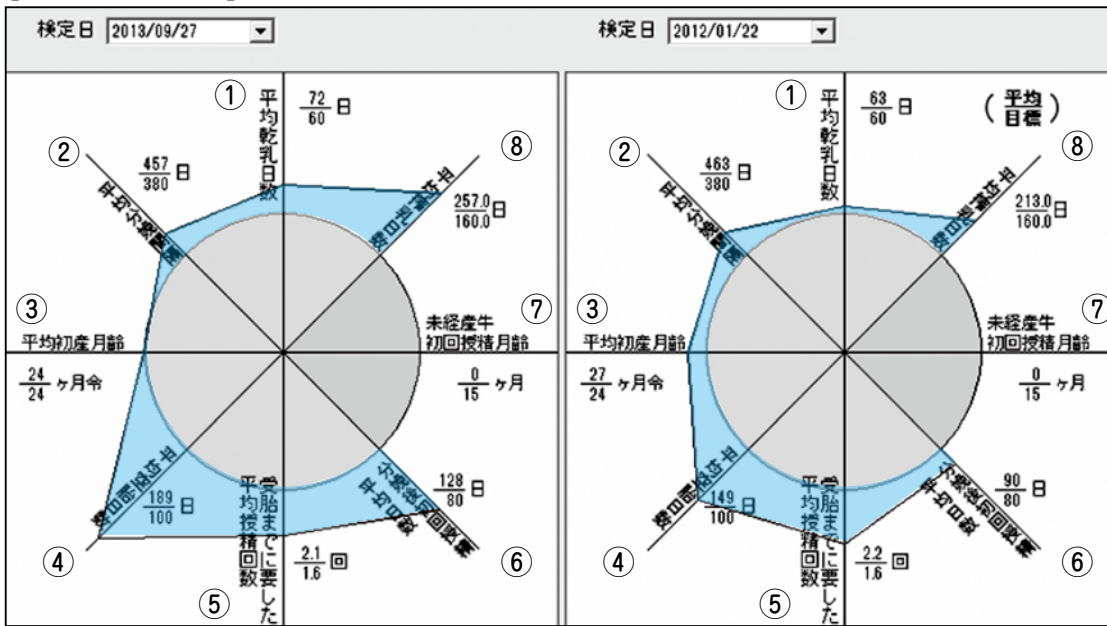
近年の酪農経営では飼養規模の多頭化に伴う、投資額と生産費は甚大なものとなったことは言うまでもありません。

この投資見合いを回収し一定の収益性の維持、酪農経営の継続、家族の生活を維持向上させるためのポイントは、一般論として牛の個体に目が行き届く観察と管理が大切と云われます。

果たして、あなたの酪農経営において、繁殖管理はうまく行っていますか。「授精の良し悪しが酪農経営を『楽農』にするか『落農』にするか」の分岐点と考えます。

本誌先月号の巻頭記事は、特集「新技術に着目」として「分娩事故・発情見逃しゼロ」の支援アイテム「モバイル牛温恵」を紹介しましたが、今回は、繁殖管理の分娩間隔に焦点をあててみました。

【繁殖情報グラフ】



「次のグラフに着目を「田」の内輪範囲内であればOK」

上記のグラフは、牛群検定事業に参加された酪農家から得られた年間データをもとに年間管理情報(繁殖情報グラフ)としてアウトプットしたものです。
このグラフは、縦軸上部中央に配置する①平均乾乳日数から順次左周りに②平均分娩間隔、③平均初産月齢、④平均空胎日数、⑤受胎までに要した平均授精回数、⑥分娩後初回授精平均日数、⑦未経産牛初回授精、⑧平均搾乳日数の八つの項目に関して、酪農経営の健全化のための目標数値と個別経営の数値を比較し、立ち位置が確認出来る内容となっております。

【グラフに示す8つの項目の目標値】

8つの項目内容	目標値①	H25年9月現在のデータ②	H24年1月現在のデータ③	目標値との比較I ②-①	目標値との比較II ③-①
①平均乾乳日数	60日	72日	63日	12日	3日
②平均分娩間隔	380日	457日	463日	77日	83日
③平均初産月齢	24ヶ月令	24ヶ月令	27ヶ月令	0ヶ月令	3ヶ月令
④平均空胎日数	100日	189日	149日	89日	49日
⑤受胎までに要した平均授精回数	1.6回	2.1回	2.2回	0.5回	0.6回
⑥分娩後初回授精平均日数	80日	128日	90日	48日	10日
⑦未経産牛初回授精月齢	15カ月	-	-	-	-
⑧平均搾乳日数	160日	257日	213日	97日	53日

あなたは、上記の「繁殖情報グラフ」からどのようなことを思われましたか?。改めて、グラフは何を悟るよう語りかけ、又は示唆しているのでしょうか。
今回の記事では、あえてコメントは差し控えて戴きたいと考えます。組合員の皆さん、又は関係者の皆さんからのコメントをお寄せ戴きたいと思っています。コメントは、本紙巻末のメールアドレス宛、もしくは、広酪の地域担当職員宛にお寄せ戴ければ幸いです。

「二. グラフが語るものは何? あなたの感想を聞かせて下さい」

この酪農経営体と目標数値とを比較してみると、酪農経営体では「①平均乾乳日数」、「③平均初産月齢」は目標値に近似値で理想の範囲内にあると考えられます。
しかし「②平均分娩間隔」は、目標値と比較して約二カ月低い数値、また、「④平均空胎日数」、「⑧平均搾乳日数」は、目標値と比較して概ね三カ月低い数値にあります。
このことは、この酪農経営体に何を示唆しているのでしょうか。

三. 儲かる酪農経営とは？

儲かる酪農経営を支える柱は、幾つもあるものなのでしょうか？

「儲けて明るい酪農」を築いて行くためには、何はさておき、繁殖管理において、授精適期を見逃さないことが重要と云えます。

発情管理における観察は、一日三十分四回の頻度で牛個体の様子管理が重要と示唆する文献もあります。

果たして、皆さんの酪農経営ではどのような実態にありますか。発情兆候において、「微弱発情でよく分からない」、「種付けしても、受胎しない」、「猛暑で種付けがうまくいかない」といった声が聞こえそうです。

儲かる酪農経営のためには、移行期、分娩前後の管理を怠ることなく、授精、受胎、分娩、泌乳の各ステップにおける徹底した飼養管理はもとより重要で、とりわけ目視による観察と観察結果を踏まえての栄養管理など行き届くことが一番では無いのでしょうか。

しかし、ご自身のタイムスケジュールにおいて、どうしても繁殖・分娩な

どの牛観察など、管理が行き届かない場合は、このリスク防止にあたり、前月の本誌巻頭記事で紹介した「モバイル牛温恵」の利用も一考されては如何でしょうか。

あなたの繁殖管理のお悩みを解消

モバイル牛温恵

分娩事故 発情見逃し 0へ



QRコードから簡単にアクセスできます

四. 最後に

「繁殖管理がうまく行かず申告数量が未達になっていませんか？」

広酪の平成二十五年度の生乳

受託目標数量は、生乳出荷組合員個々の申告数量を積み上げた数量の五万五千八百八十二・六トンであります。

平成二十五年度の上期実績数量は二万六千八百十七・〇トンと年間申告数量の一ノ二量の二万七千九百四十一・三トンとの対比では九十五・九%となります。

数量差では千二百二十四・三トンとなり、単純に平成二十五年九月のプール乳価一〇五・一七三円を乗じますと約一億千八百二十四万六千円の収入減少と計算されます。

この収入減少が、酪農経営に様々な影響を与えていますか。問題解決には、牛群検定事業によるデータを活用するののも一つです。検定参加の生乳出荷組合員には、牛群検定データにより幅広い活用を呼びかけさせて戴きます。

一方、未参加の生乳出荷組合員には、是非とも前向きに牛群検定事業の利用を考えて戴きたいものです。検定員、利用料金負担の問題など様々ありますが、科学的根拠に基づき、酪農経営の実態把握と改善を図る上においても・・・。

【参考】飼養頭数の過去と現在

広酪が行った飼養頭数調査（八月一日現在）では、調査戸数百五十三戸、飼養頭数は八千三百六十六頭で内経産牛頭数は五千九百六十九頭、一戸当たりの平均飼養頭数は五十四・六頭となっています。

昭和三十五年の県内の飼養戸数は六千四百九戸、飼養頭数一万一千四百四十九頭、一戸当たりの平均飼養頭数は一・七八頭、最も飼養頭数が多かったのは昭和四十五年の二万一千九百一頭で、飼養戸数は四千四百二十七戸、平均飼養頭数は四・九頭でした。

